

# *L'Hérésiarque et Cie* にみられる 冒頭部分の変遷について

—新しい詩人への出発—

伊 勢 晃

## I

Apollinaire の最初の短篇集 *L'Hérésiarque et Cie* は1902年から1910年までに発表された作品から構成されている<sup>(1)</sup>。この時期に彼は作品の主要なモチーフとなる貴重な数多くの経験をしたのであった。1901年から2年にかけてのドイツ、ライン地方での滞在、イギリス人家庭教師 Annie Playden への恋と破綻、André Salmon, Max Jacob, Alfred Jarry らとの雑誌 *Le Festin d'Esope* の創刊、生涯の親友 Pablo Picasso との出会い、そして1912年まで続くことになる Marie Laurencin との恋などすべて詩人にとって重大な事柄ばかりである。また第1詩集 *Alcools* に収録される28篇の作品が発表された時期でもあり、その中には単独にでも研究対象となる *La Chanson du mal-aimé* をはじめ、*Les Colchiques*, *Crépuscule*, *Le Brasier* などが含まれていることにも注目すべきであろう。この時期に編まれた作品集 *L'Hérésiarque et Cie* に見られる特徴を考察することは、20世紀芸術の進むべき方向を決定したと言われる詩人を理解するために必要不可欠なことと考えられるのである。

さて、この短篇集を構成している作品を、発表年を意識して読み直していくとき、それぞれの冒頭部分の提示が少しずつ変化していることに気付かずには済まない。もちろん、文の書き出しが、物語の構成上どれほど大きな意味を持つかは多くの批評家が指摘しているとおりである<sup>(2)</sup>。

本稿は、L'Hérésiarque et C<sup>te</sup> の各作品の冒頭が、執筆の時期によってどのような相違、あるいは変化があるかを考察することにより、この時期における詩人の創作理念がどのように変化していたかを明らかにしようとするものである。

## II

L'Hérésiarque et C<sup>te</sup> を各主人公の死という観点から眺めたとき、この作品集が「現実→非現実→現実」という構造になっていることは、拙稿<sup>(4)</sup>で述べたとおりであるが、発表年別に作品を見直すならば、冒頭の内容から大きく3つの時代に分類することができる。それは、i) 1902年～3年、ii) 1905年～7年、iii) 1908年～10年、である。以下、これら3期に特有の冒頭部分のあり方をそれぞれ検討してみよう。

### i) 1902～3年

この時期に発表された10作品<sup>(4)</sup>に共通しているのは、冒頭部分において、物語が展開する日時、場所、さらに主人公の特徴がかなり細かく描写されていることである。L'hérésiarque においては、最初から主人公 Benedetto Olfei が異端の宗教を開こうとした時期の宗教界の混乱した状況が語られる。

Le monde angro-saxon s'intéresse aux questions religieuses. En Amérique surtout, de nouvelles religions issues du christianisme surgissent chaque année et recrutent nombre d'adhérents.

Au contraire, les réformateurs et les prophètes laisseraient la Catholicité fort indifférente. (...) A la vérité, il arrive souvent que des prêtres catholiques se séparent de l'Église. Ces fuites sont dues à la perte de la foi. Beaucoup de ces prêtres s'en vont à cause de leurs opinions spéciales sur des points de morale ou de discipline<sup>(5)</sup>.

これらの描写のあと、異端教祖がローマ近郊のフラスカティの別荘に住んで

いることや大食漢で食通であることなどの特徴が述べられ、ようやく物語が動きはじめる。

この短篇に読んで発表された *Le passant de Prague* においても、第1行から事件の起こる日時、場所が詳しく示される。また、それに続く文章で、物語の舞台であるプラハの古い街ではチェック語、フランス語は通じるが、ドイツ語は一言も使われないことやしばらく前にパリでは Victor Hugo の生誕100年を記念する祭典が行われていたことなど、歴史や地名や言語の特徴などを盛り込むことで、読者にさらに詳細な情報を与えている。

En mars 1902, je fus à Prague.

J'arrivais de Dresde.

Dès Bodenbach, où sont les douanes autrichiennes, les allures des employés de chemin de fer m'avaient montré que la raideur allemande n'existe pas dans l'empire des Habsbourg. (...)

Peu de jours auparavant, Paris avait fêté le centenaire de Victor Hugo. (...) Sur les murs, de belles affiches annonçaient les traductions en tchèque des romans de Victor Hugo<sup>6)</sup>.

これらの情景描写のあとに、ようやく語り手の“私”は、さまよえるユダヤ人である Isaac Laquedem と出会い、幻想的な世界へと次第にわれわれ読者を誘っていく<sup>7)</sup>のである。このように物語の舞台となる時や場所が特に詳しく語られるものとしては、他にヨーロッパに伝わる好色な民間伝承をもとに書かれた *L'otmika*<sup>6)</sup> や洗礼の有効性の問題を扱った *Le juif latin* などがある。

また、物語の舞台以外に、主人公や登場人物が綿密に紹介されてから物語がはじまる方式の作品としては、*Trois histoires de châtements divins* や、*L'otmika* と共に「ヨーロッパの生活の絵画的で魅力ある景色」<sup>6)</sup> を利用した作品 *La rose de Hildesheim*, *Les pèlerins piémontais*, *Que Vlo-ve?* などがある。特に *La rose de Hildesheim* においては、冒頭部分で日時、場所そして主人公のどれもがこと細かに描写されている。

Il y avait, à la fin du siècle dernier, à Hildesheim, près de Hanovre, une fille qui s'appelait Ilse. Ses cheveux, d'un blond pâle, avaient des reflets un peu dorés et donnaient l'impression d'un clair de lune. (...)

C'est une des plus jolies petites villes du monde que Hildesheim. Avec ses maisons peintes, de forme étrange, aux toits démesurés, elle semble sortir d'un conte de fées. Quel voyageur pourrait oublier le spectacle de sa place de l'Hôtel-de-Ville, qui est d'un pittoresque fait pour encadrer du lyrique?<sup>69</sup>

このように、この時期に発表された諸作品には、Balzac を一例とするいろいろな作家と同様に、まず読者に対して物語の現場、時期、人物などに関する情報が詳しく示されるという特徴がある。その意味では、この時期の作品の書き出し方は伝統的なものと言えるかもしれない。

#### ii) 1905～7年

1905年は、美術批評家としての Apollinaire には重要な年であった。彼は、4月に雑誌 *La Revue immoraliste* に《Picasso, peintre et dessinateur》という表題で、無名の Picasso を取り上げた<sup>69</sup>。そして、死の直前まで続いた二人の手紙の交換もこの年に始まっている<sup>69</sup>。

この時期に発表された8作品<sup>69</sup>の書き出し部分を見ていくと、物語が進行する空間や人物の説明はされているものの、それ以前の作品ほど具体的にかつ詳細には語られていないことがわかる。*Histoire d'une famille vertueuse d'une hotte et d'un calcul* では、*Le passant de Prague* でみられるような、ホテルの名前、ポスターの文字、ショーウィンドーの様子などを明示する方法で町が描かれているのではなく、人々の働く様子、鳥のさえずり、樹木の揺れなど動きのあるもの、感覚的なものからその雰囲気を読者に伝えている。

Un matin, à cinq heures, une insomnie m'avait fait me lever et sortir. C'était la fin de mars. Les rues bleussaient, froides et désertes. Des porteurs de journaux passaient. Les sous-sols des boulangeries laissaient sortir la chaleur de la dernière fournée, et des gens nus et enfarinés gesticulaient, tachés de lueurs venues du brasier. Je suivis le boulevard de Courcelles et longeai le

parc Monceau, à cette heure plein de chants d'oiseaux et du mystère suscité par l'étang que veille la colonnade ruinée, tandis que les arbres élançaient le galbe de leurs fûts et secouaient leur frondaison nouvelle<sup>69</sup>.

具体的なものによって場所が描写されるよりも、この引用のように感覚的なもので表現されるほうが読者に想像を許す幅が広がると考えられよう。これに類することは人物描写の場合についてもいえる。

*La serviette des poètes* では、会食者たちの様子を描くのに比喩表現が多用されている。

David Picard venait de Sancerre; il descendait d'une famille juive christianisée, comme il y en a tant dans la ville.

Léonard Delaisse, tuberculeux, crachait sa vie d'inspiré, avec des mines à mourir de rire.

Georges Ostréole, les yeux inquiets, méditait, comme autrefois Hercule, entre les entités du carrefour.

Jaime Saint-Félix savait le plus d'histoires; sa tête pouvait tourner sur ses épaules, comme si le cou n'avait été que vissé dans le corps<sup>69</sup>.

肺結核を患っている「笑い死にしそうな」者や「ヘラクレスのように」不安な目つきで瞑想する者、そして「首が胴体にあたかもネジでつけられているかのように」頭が回せる者など、どれもそれらの人物を感覚的に描写したものであって、決して具体的な特徴を述べたものではない。

また、作品集の最後を飾る、一連の5作品の主人公 le baron d'Ormesan の人物像についても、読者に与えられる情報は極めて少なくされている。われわれが知り得ることは、語り手が15年も会っていない中学時代の友人であること、パリでガイドをしているということ<sup>69</sup> だけである。ここでは *La rose de Hildesheim* にみられたような人物描写は見事に姿を消してしまっている。この主人公が、短篇集の中でもっとも中心的な働きをする登場人物の1人であることを考えると、やはりそれ以前の作品に比べて、情報が凝縮されていること

は明らかである。細部にわたる無駄な描写がなくなり、必要最低限のことのみが記述されていることによって、読者の想像力の介入できる余地が増すのである。つまり、そのことによっていっそう作品の幻想性が高まり、読者にさまざまな読み取りが許されるわけである。Picasso, Braque など前衛画家との関係がはじまったこの時期には、短篇の冒頭部分から伝統的な話法が排除されはじめたと感じられる。

### iii) 1908～10年

1908年は、詩人が評論活動を本格的にはじめた年である。4月には Exposition des Indépendants において *La Phalange nouvelle* という題で、これからの新しい詩が目指すものについて講演をした<sup>69</sup>し、6月には Exposition du cercle de l'Art du Havre のカタログに序文を寄稿した<sup>69</sup>。また、Braque に関して高い評価を下した<sup>69</sup>のもこの年のことであった。これらの評論で、Apollinaire は既存芸術の限界を指摘し、新しい芸術の必要性を述べている。もっとも、*Les Trois Vertus plastiques* で、この新しい造形芸術がまだはじまらばかりであると指摘していることや、わずかながら既存芸術に対する敬意がうかがわれることからすれば、のちに展開される芸術観ほど完成されたもの<sup>69</sup>ではないが、新時代の旗手となる詩人にふさわしい独自の発想が全体を通して見受けられるのである。

この時期に書かれた5作品<sup>69</sup>の冒頭に共通する特徴は、物語の舞台に関する情報がほとんどなくなり、逆に、この部分では「謎」が提示されるようになってくることである。例えば *Cox-City* において、語り手は le baron d'Ormesan の古傷を発見するが、男爵はすぐに手でこれを隠してしまう。

Le baron d'Ormesan porta vivement la main à la cicatrice que je venais d'apercevoir, et ramena ses cheveux pour la couvrir<sup>69</sup>.

そしてこの傷の謎を中心に、物語がはじまるのである。さらには、*La disparition d'Honoré Subrac* や *Le toucher à distance* は、物語の最初に

迷宮入りになったままの奇怪な事件という状況が与えられる。

En dépit des recherches les plus minutieuses, la police n'est pas arrivée à élucider le mystère de la disparition d'Honoré Subrac<sup>(9)</sup>.

Les journaux ont rapporté l'extraordinaire histoire d'Aldavid, qu'un grand nombre de communautés juives des cinq parties du Monde prirent pour le Messie, et dont la mort survint à la suite de circonstances qui parurent inexplicables<sup>(10)</sup>.

各篇とも上記のように語り手が謎の事件の真相を知っていて、そこから物語が発展していくのである。*Simon Mage* の場合には、突然「ある男」が登場して、その風采が語られるが、この男の正体が明らかにされるのは少したってからのことである。

...Et tandis que la foule rendait gloire à celui dont les disciples accomplissaient tant de prodiges, un homme aux cheveux noirs et frisés, à la barbe rousse et fine, à la face fardée, s'approcha du diacre Philippe et lui dit (...)<sup>(11)</sup>.

この冒頭部分でみられる登場人物の描写は、読者にその人物についての情報を与えるというより、むしろ疑問を抱かせるためのもののように思われる。この特徴は今までにみてきた人物描写とは大いに異なるものである。

以上のように、この時期の作品群の冒頭においては、物語の進行する時や場所などの情報はもはや読者に与えられなくなる。つまり読者としては何の準備もないままに物語の渦中に投げ入れられることになるのだ。

これらの冒頭部分では「この作品では時間軸と空間軸という座標軸にあてはめた物語の展開は行われぬ」ことが読者に暗示されるとともに、最初に深い謎につつまれた事件や人物が提示されることによって、作品により一層の幻想性が付与されているのである。

## III

われわれは、*L'Hérésiarque et C<sup>66</sup>* の各作品の冒頭部分が、執筆の時期によって、どのように変化しているかを検討してきた。そして、最初に物語の舞台となる時間、場所や登場人物を詳述し、読者に情報を与えるという伝統的な書き出しの役割が次第に薄れ、ついにはこの部分が、情報を提供するのではなく、逆に「謎」を提示する働きへと移行し、作品の持つ幻想性がより深まっていることが明らかとなった。

Apollinaire がこのような冒頭の設定をするに至ったことには必然性があったと言えるかもしれない。すなわち「時空間を越えた『概念の現実』を読者に提示するのが芸術家の役割だ」<sup>68)</sup>と考えた詩人として当然の成り行きだったのである。*L'Hérésiarque et C<sup>66</sup>* の執筆されたこの時期に、Marie-Jeanne DURRY が《Mainteneur et novateur à la fois, c'est lui.》<sup>69)</sup>と評する詩人の姿が現れはじめたのである。このような意味で、*L'Hérésiarque et C<sup>66</sup>* にはのちに *Alcools* や *Calligrammes* を生み出す詩人のエッセンスがすべて含まれていると言えよう。

本稿では、冒頭部分と物語の内容との関係については、ほとんど論じなかった。また、他の短篇作品の書き出しについても扱わなかった。これらの点に関しては、今後の課題としたい。

## 作品テキスト

- 略号 PL 1 : *Œuvres en prose I*, Gallimard, 《La Bibliothèque de la Pléiade》, 1977  
 PL 2 : *Œuvres en prose II*, Gallimard, 《La Bibliothèque de la Pléiade》, 1991  
 CA : *Chroniques d'art 1902-1918*, Gallimard, 1981

## 注

- (1) そのほとんどが雑誌、新聞等に発表されたものであるが、*Simon Mage, Le cigare romanesque, Le toucher à distance* は、この短篇集が初出である。  
 (2) Raymond Jean, Roland Barthe, 前田 愛など。



- (3) 伊勢 晃, 「L'Hérésiarque et C<sup>66</sup> の作品構造について——主人公の死という観点からの考察——」, 『年報フランス研究』, 第26号, 関西学院大学フランス学会, 1992
- (4) *L'hérésiarque, Le passant de Prague, Trois histoires châtements divins: I. Le giton, II. La danseuse, III. D'un monstre à Lyon ou l'Envie, La rose de Hildesheim, L'otmika, Le juif latin, Les pèlerins piémontais, Que Vlo-ve?* の10作品
- (5) PL 1, p. 110
- (6) PL 1, pp. 83-84
- (7) 伊勢, *op. cit.*, pp. 16-19
- (8) PL 1, pp. 1128-1129
- (9) PL 1, p. 1128
- (10) PL 1, p. 158
- (11) PL 2, p. 78
- (12) *Picasso/Apollinaire correspondance*, édition de Pierre Caizergues et Hélène Seckel, Gallimard, 1992, p. 29
- (13) *Histoire d'une famille vertueuse, d'une hotte et d'un calcul, Le sacrilège, La serviette des poètes, Le matelot d'Amsterdam, Le Guide, L'infailibilité, Un beau film, La lèpre* の8作品
- (14) PL 1, p. 181
- (15) PL 1, p. 191
- (16) PL 1, p. 195
- (17) PL 2, pp. 885-900
- (18) CA, pp. 71-74
- (19) PL 2, pp. 110-112
- (20) 伊勢 晃, 「アポリネールと彼の新芸術観——短篇 Le Passant de Prague と詩 Zone を中心に——」『人文論究』, 41-4, 関西学院大学人文学会, 1992
- (21) *Cox-City, La disparition d'Honoré Subrac, Simon Mage, Le cigare romanesque, Le toucher à distance* の5作品
- (22) PL 1, p. 208
- (23) PL 1, p. 171
- (24) PL 1, p. 212
- (25) PL 1, p. 130
- (26) 伊勢, *op. cit.*, pp. 136-137
- (27) Marie-Jeanne DURRY, *Guillaume Apollinaire Alcools tome III*, SEDES, 1964, p. 238